

II 特別連載 II

科学技術
振興機構

『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第314回

SSP オンライン大学訪問く北海道大学く

JSTさくらサイエンスプログラム推進本部

科学技術振興機構(JST)は、北海道大学との共催により、第15回さくらサイエンスプログラム「オンライン大学訪問く北海道大学く」を開催した。本イベントは、JSTが海外の高校生・大学生にオンライン疑似訪問体験を提供し、日本の優れた大学について彼らの関心を高め、日本留学への意欲を高めてもらうことを狙いとして実施している。

本イベントは7月16日、北大札幌キャンパス創成研究機構(RED)サロンにおいて、Zoomウェビナーにてライブ配信された。タイ、インド、マレーシアなどアジアの国・地域を中心に42カ国から1886名が参加し、イベント中には海外視聴者から170の質問がウェブナー質問箱に投稿された。

今回は、理学院の2年生でタイ出身の留学生 SUPHAPOLTHAWORN SuphakornさんがMCを担当。終始なごやかな雰囲気の中プログラムが進行された。冒頭、ウェルカムスピーチとして、資金清博館長からビデオメッセージがあり、同大は北海道の豊かな自然を背景に、農学・森林学・水産学など多彩な専門領域の研究が行える環境が備わっていること、イギリスの高等教育専門誌「Times Higher Education」の「THEインパクトランキング2022」では日本国内で1位、総合ランキング世界10位にランクインしたことなどが



Q & Aセッション

「オンライン大学訪問」トップページ

URL:<https://ssp.jst.go.jp/en/jst/online/>

北海道大学の回(アーカイブ)

URL:<https://ssp.jst.go.jp/en/jst/online/online16.html>

話された。

大学概要説明においては、高橋彩副理事より、すでに100カ国・地域から2000名もの留学生が学び、在籍する外国籍教員が留学生をサポートする環境が整っていることが紹介された。また、留学生を対象とした英語による理系プログラムIntegrated Science Programとバイリンガルプログラムである現代日本学プログラム課程について説明が行われた。どちらの制度も入学時に日本語力を有する必要はなく、さらに授業料減免制度や奨学金制度も整っている。この国際色豊かなキャンパスと留学生支援制度の紹介に、視聴者から「国際色豊かなキャンパスであることは安心」「北大に入学する具体的な方法を知ることができた」との感想が聞かれた。

工学研究院/化学反応創成研究拠点(WPI-ICRED)副拠点長の伊藤肇教授には、有機溶剤を使わずに「機械的な力」で化学反応を起すという新しい有機合成手法「メカノケミストリー」の研究紹介と同研究室のラボツァー、実験室で実習に取り組みイタリア、中国、韓国などから集まった研究者のインタビュールを行ってもらった。最先端の研究とリアルな実験室を間近に見ることができた視聴者からは「これまでの概念を覆す革新的な研究に驚いた」「実験機材を学生が自由に使えるすばらしい環境」「伊藤教授と一緒に研究したい」というコメントが殺到した。

「International Student Life in Hokkaido」のチーフ・アドバイザー・ロミネエケーション研究院の石見禎講師がモデレーターとなり、留学生のRIOS Joseyan(米国)、WANG Maixun(フィリピン)、QURESHI Irtazaan(パキスタン)、RIEWUANG Sirateyan(タイ)の4名が北海道での生活体験談、困難に直面した際の解決方法、海外学生への留学アドバイスなどを発表。「適度に都会で自然が身近な札幌の生活をエンジョイしている」「日本語力は生活するうえでやはり大切」「自立し自分自身でタイムマネージメントすることは難しいがとても大事」など、実体験に基づく先輩の話には説得力があった。これに対し、「漠然と描いていた留学をリアルにイメージすることができた」「ウェブ検索では知りえない情報だった」との感想が寄せられた。

日本学生支援機構の日本留学制度説明の後、



会場集合写真

Q&Aセッションが行われ、高橋副理事、伊藤教授、留学生2名が、視聴者から投稿された質問に答えた。「研究で一番面白いと感じる瞬間は？」との質問に、伊藤教授からは「アイデアは研究にとっても重要。学生たちが考え出す面白いアイデアが成功しない

第5回SSC日本同窓会を開催

さくらサイエンスプログラム

科学技術振興機構とさくらサイエンスクラブ(SSC)日本同窓会の共催で7月23日、東京グリーンパレス及びオンラインにて「Research Life in Japan」をテーマとしたSSC日本同窓会が開催され、日本及び世界のさくらサイエンスプログラム(SSP)同窓生76名が参加した。

今回は万全の感染対策を講じて同窓生10名が会場で実参加し、コロナ禍で初めて同窓生が対面で交流し、Zoomの質問・チャット機能や新たに投票機能も取り入れてオンラインの参加者との交流も実現した。

■ 開会挨拶

SSC日本同窓会幹事長のDr. Lai Hung Wei(マレーシア)から2015年にSSPで初来日して九州大学と先端医療の交流を実施その後、再来日して高知大学で特任助教として活躍中)の司会により、JSTの甲田彰理事が挨拶し、コロナ禍にあっても活動を継続する同窓会に感謝の意が述べられた。

ことも多々あるが、うまくいった時は私にとってもうれしい瞬間だ」と、伊藤研究室のフレンドリーさが伝わる回答があった。
イベントの収録動画は、「オンライン大学訪問」特設ページのアーカイブ(SSPウェブサイト)で公開している。

■ 同窓生によるパネル討論

開会挨拶に続いて同窓生のMr. Johannes Nicolaus Whisana(インドネシア)から2014年にSSPで初来日して静岡大学と農学研究所の交流を実施。その後、再来日して沖縄科学技術大学院大学の博士課程で活躍中)の司会で「日本各地で活躍する同窓生の研究生活」をテーマに、日本で乗り越えた困難・自国との違い・現在の研究環境などについて、会場に会場した10名の同窓生(インドネシア・ベトナム・インド・バングラデシュ・ミャンマー)によるパネル討論が行われた。

討論では、SSPでの初訪日を契機に日本の大学に再来日した後、言語や食事の問題、コロナ禍で母国に帰省できない等の苦労を克服し、時間厳守の文化等を習得、指導教官の親身な対応を受けて、日本人の優しさに触れて恵まれた研究環境で研究に邁進している等の発言があり、また、日本の研究マネジメントは優れている、産学官の連携が進んでいる、指導教官から十分な指導を受けることができる、研究機材の入手に時間がかからない、危険物のリスク管理がしっかりしている等の意見が出され、日本の研究環境は素晴らしいとの意見が大勢を占めた。

■ 日本の研究紹介

同窓生によるパネル討論に続いて、日本同窓会会長のDr. Lai Hung Weiが、日本の研究の紹介として自身が所属する高知大学医学部の研究者が日本の研究紹介を行った。降幡睦夫医学部長から医学界の現状を踏まえた高知大学の医学分野での研究の取り組みについて紹介があり、井上啓史教授から「光でがんを治す光線力学療法の最新の研究」について講演が行われ、福原秀雄助教から治療法の実例としてALAを用いて発光させた膀胱癌切除の紹介が行われた。参加者は日本初の本格的な「光線医療技術」を基盤とする先進的で独創的な組織の研究の状況に接することができ、オンラインで多くの質問が寄せられた。

■ 閉会挨拶

JSTさくらサイエンスプログラム推進本部の伊藤宗太郎企画運営室長から、今回の同窓会を契機に同窓生のネットワークが強化され、在外の同窓生の再来日を喚起されることへの期待が述べられた。